部活動における組織構造がもたらす影響

1220577　山中　さや
指導教員　上村　浩

研究背景

近年、部活動での体罰問題が多発し、大きな社会問題となっている。このような問題の背景には、指導者と部員とのコミュニケ―ションを含む組織マネジメントの困難性がある。体罰に至る原因として「勝利こそ成果である」という勝利至上主義が重視されていることが挙げられるが、文部科学省が目指している指導方針は生徒の自主性について強調されている。よって、本研究では、現在の部活動が標榜すべき組織構造について研究する。

研究目的

本研究では、部活動(チームスポーツ)を行っている高校生・大学生を対象に組織構造に関する調査を行い、組織構造・組織管理と教育的意義および各生徒の将来への志向性との関係を明らかにする。また、結果を基にこれからの部活動において、どのような組織管理を実践していくべきかを検討する。

調査・分析方法

アンケート調査では、高校生・大学生を対象に、所属している部活動が官僚型組織とネットワーク型組織のどちらを志向したのかを判別した。そして、分類した調査結果を基に組織構造と教育的意義・将来性との関係性を検証した。さらに、指導者を対象に部が志向する組織構造と部活動の運営状況等を明らかにするための構造化インタビューを行った。

分析結果

ネットワーク型組織は、部活動における人間関係が良好で、現在行っているスポーツについて、将来もこれに関わりたいと考えている学生が多くいることが示された。一方、指導者側としてはネットワーク型組織による管理に不安を感じている。具体的には選手の自主性を尊重しすぎると、このことが選手の甘えに繋がること、またキャリアの低い選手の自主性に限界があること、等を挙げている。

考察・結論

分析結果から、ネットワーク型組織を標榜している部活動では、学生が主体的に部活動を運営し、また当該スポーツを生涯スポーツとして捉えていることが分かった。さらに、選手の自律性や経験がネットワーク型組織をより効果的に機能させる可能性がある。また指導者が考えているネットワーク型組織の不安要素については、選手のキャリアアップの場を設けることで改善される可能性がある。